

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成24年10月16日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 教育学研究科・教育科学専攻

職 名・学 年 博士課程3年

氏 名 河 井 亨

助成の種類	平成24年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	サービス・ラーニングとコミュニティ・エンゲージメントの学術研究国際学会 年次大会2012		
発表題目	サービス・ラーニング・コースにおける“ラーニング・ブリッジング”		
開催場所	アメリカ合衆国メリーランド州ボルチモア マリオット・ボルチモア・ウォーターフロント ホテル		
渡航期間	平成24年9月21日 ～ 平成24年9月28日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して 下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円	
	使用した助成金額	200,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	交通費	130,000円
		滞在費の一部	70,000円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 海外で発表するかどうか躊躇っていたところ、本助成をきっかけに、発表に踏み切ることが できました。ありがとうございました。		

成果の概要／河井亨
国際研究集会派遣助成報告書

教育学研究科 教育科学専攻 博士課程 3年 河井亨

研究集会名

：サービス・ラーニングとコミュニティ・エンゲージメントの学術研究国際学会年次大会

開催場所

：アメリカ合衆国メリーランド州ボルチモア マリオット・ボルチモア・ウォーターフロントホテル

開催期間

：平成 24 年 9 月 23 日-平成 24 年 9 月 26 日

サービス・ラーニングとコミュニティ・エンゲージメントの学術研究国際学会について

当学会は、アメリカを中心とするサービス・ラーニング研究の国際学会です。サービス・ラーニングとは、地域社会での社会活動経験を教育に取り入れた大学教育実践で、アメリカで全国的に広がり、かつその有効性が認められている実践のことです。今年（2012 年）1 月には、アメリカで 1250 以上の高等教育機関がメンバーとなる全米カレッジ・大学協会（Association of American Colleges and Universities: AAC&U）が『A Crucible Moment: College Learning & Democracy's Future Civic Engagement』という重要な報告書を提出しました。当学会には、この報告書に関わった主要メンバーが参加し、この報告書に関するワークショップも開催されていました。

印象に残ったセッションは、『Research On Service Learning: Conceptual Frameworks and Assessment』の各著者たちが最新の研究を報告していくセッションです。この編著は、サービス・ラーニングに関する研究をまとめていくシリーズの第二巻で、重要な業績を残したサービス・ラーニング研究者が多数執筆しています。サービス・ラーニングは、上述の通り、高等教育の教育実践ですが、そのテーマは学生・ファカルティ・コミュニティ・高等教育機関と多岐にわたっています。北米において、サービス・ラーニングは有効な教育実践であるという評価を超えて、市民教育として 21 世紀のグローバル社会に不可欠な教育という評価を得つつあることを実感しました。

他に『研究成果をいかにパブリッシュするか』というセッションへの参加や大学院生交流やメンター制度を通じ、Robert, G. Bringle (Appalachian State University)、Andy Furco (University of Minnesota)、Jeffrey Howard (University of Michigan)、Patti Clayton (PHC Ventures) らと意見交換をすることができました。また、自分の研究論文を読んでもらい、コメントをもらうことができました。

本学会に参加し、得た成果は以下になると考えます。

- ・ サービス・ラーニング研究の現状と展望を理解することができたこと
- ・ サービス・ラーニングという教育実践だけでなく、民主主義、市民教育やコミュニティ活動それ自体が研究のテーマとなっていること
- ・ アメリカをはじめとする諸外国の第一線で活躍する研究者と交流できたことと同世代の大学院生と交流できたこと

自分の研究発表について

自分の発表の概要は下記の通りです。

本研究の第一の目的は、日本の高等教育におけるボランティア活動の現状を明らかにし、日本の高等教育におけるサービス・ラーニングの今後についての展望を描くことである。そこで、日本の大学生を対象に行った全国規模の大学生調査『大学生のキャリア意識調査 2010』の分析を通じて、ボランティア活動の参加と学生の学習との関連を分析した。

本研究の第二の目的は、アメリカでのサービス・ラーニング研究で提出されたリフレクション概念を活用して、サービス・ラーニングにおける学生の学習について考察することである。本研究では、リフレクションに加えて、複数の異なる文脈で行われる学習を結び合わせて統合する活動を意味するラーニング・ブリッジングを検討した。質問紙調査の結果、リフレクションが学習成果にポジティブな影響を及ぼすということが確認され、リフレクションとラーニング・ブリッジングが組み合わさった時に学習成果がさらに大きなものになることが明らかになった。自分自身の経験を振り返ったり省察したりするリフレクションが学生の学習にとって重要であることは先行研究の主張する通りであった。その上で、複数の活動での経験を結び合わせて統合するラーニング・ブリッジングを通じてそのリフレクションがさらに深化する可能性が見出されたことが本研究の成果である。

本発表を通じ、日本の高等教育におけるサービス・ラーニングの現状を発信するとともにラーニング・ブリッジングというコンセプトが多くの実践者や研究者にとって魅力あるものと映ったことが私にとっての収穫と言えます。発表や議論の後、*Michigan Journal of Community Service Learning* や *PRISM: A Journal of Regional Engagement* への投稿を勧められるなど、自分の研究が大いに励まされました。

最後に、今回の国際会議発表に対し助成して頂いた京都大学教育研究振興財団に厚く御礼申し上げます。

2012年10月16日

河井亨